慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | イギリス史に現はれたるイギリス人の國家的觀念とその特性とに就て(上) |
| Sub Title | |
| Author | 朝日, 融溪(Asahi, Yukei) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1931 |
| Jtitle | 史学 Vol.10, No.2 (1931. 6) ,p.81(239)- 96(254) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310600-0081 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# イギリス史に現はれたるイギリス人の國家的觀念とその特性とに就て（上）

## 一

『イギリス人の國家的觀念とその特性とに就て』と言ふ題目はあまりに平凡であると共に冒險的であるかもしれぬ。今更之に就て言ふべき新しい何事もないし、また、あまりに多く斷言することは危險に陷入る恐れがある。然しこうした題目を捕えんとした私の考へは歐洲大戰の結果多くの國は瓦解、若しくは分裂して、いま新しき國家の建設に忙はしい。彼等の過去に於ける或る國家として抱いた觀念に就て不明瞭ではあるが、興味ある疑問に思ひ至つたので、かゝる問題に就て考へて見たいと思ふのである。

イギリス人はイギリスの隣國がイギリス人の前に提供したイギリス人自身の立派な幻影をそのまま眞實のものとして認むることに於いて躊躇する何物かゞないであらうか。私はイギリス人の國民的自覺の內容に就て大膽なる批判を試みやうとするのである。この問題に對して私の結論が、どのやうなものに達するとしてもイギリス人が生じたる歷史上の印象はイギリス人が現今嚴然として存續することに於ける或る要素を有してをることを否む譯にはいかぬ。誤解することは疑ひもなく、不幸であるが、智的に理解してゆくこともあながちに無意味なことでもないと思ふ。

各個人の性格は甲なる人が、乙なる人を考へて

ゐるが如く乙なる人が己れ自身を考へてゐるものではないと思ふ。若し、その人がその人の現在あるところのものを明瞭に把握する理解力を缺くとすれば、それはその人にとりて一の缺點として數へねばならないのであらう。

國民と個人との間に於ける類似の推定法は、勿論、或る程度を越えて追求せらるべき筈のものではない。個人は多數であり、國民は少數である。個人の性格は、各個人の動作と行爲とによつて、判斷すべきであるが、國民は連續的性格を有するものであつて、各時代は各時代の先住者の行動によつて、創造された偏見のために是れを訂正してゆく努力を拂はねばならない。

個人の性格を判斷することに於いて、吾人は彼等の生活が營まれた事情と、境遇とに從つて變化する標準を適用することが出來る。例すれば、或る政治家の性格は彼の公的政策に表はれたるものの如く、彼の個人的生活に於いても然かるべしと判定することは出來ないのと同じである。

この方法が一國民にまで擴大されてゆく時、その國民の活動の立派なる形式のすべての評價は消滅してしまふ恐れがある。而して、たゞぼんやりとした大きな特性らしきものが、あるやうに考へらるゝに過ぎないのである。尙ほ進んで、現代に於ける各國民は各自相互に對して恰かも商業上の各會社の關係を同じ狀態に存立することを忘れてはならぬ。

すべての事情と推移とが普通なる狀態を持續してをる時、その仕事と貿易とを遂行することの相互の方法と手段とに就ての意見を表示すべき機會を何れの國民も有してはゐないのであるが、一旦、各國民の競爭が敏活となつてその利益が、衝突することゝなると彼等の競爭者の信用を傷けんがために彼等の國民の傳統的物語即ち過去に於ける彼等の全人類に對する態度の歷史が必要となつてくるのである。

たとへば、吾人が近江商人と言へば現在の商人の心と、その態度が如何にあらうとも、それを顧みることをせずに傳統的に言ひ傳へられた近江商人の性格をそのまゝ擬せんとすると同じであら

う。國際間に行はるゝ批判もこれと同じやうな基調の上に疑ひもなく、組織されてをるのであつて、一度それが了解された場合に如何なる例外も、それを破壞することは出來ないやうになつてゐるやうに思はれる。

## 二

然し、私はこの問題を考へんとする企てのために一時的の利益關係と言ふ理由よりも、もう少し根柢のある理由が存すると思ふ。それは私の獨斷であるが故に勿論保證することは出來ない。

國民的性格即ち國民性は、その國民の過去の存續的產物である。而して、過去のその概念は清算すべき最も價値あるものであつて、それはその國民の現在の境遇のためでなくて、その概念を生じたる生きた精神のために價値があるのである。而して若しそれが維持せらるべきものならば、依然として存在すべきものである。

歷史は制度の發達を記し、國家の膨脹を語り、商業の進歩を告げ、思想の發展を述べるだけで充分であるとは言はれない。過去に於ける他の制度は、現今のものよりも强固であつたかもしれないが、最早や消失してしまつてゐる。他の國家はもつと大きかつたかもしれないが今は消滅してゐる。

商業は他の時代に於いても現代と等しく冒險的であつたかも知れないが、今やその埠頭も港も共に廢墟となつてゐる。

文學は豐富な語調と含蓄ある思想とによつて著はされ、科學はより大きな綜合的體系を組み立てゐたかも知れぬが、今やそれらはたゞ僅かの學者の精神を鼓舞するに過ぎない。すべてこれらのものごとは、その終りに達してゐる。それは國民的性格が、一度得たところのものを長く保存してゆくべき力をその國民性が缺いてゐたが爲めである。而して迅速なる發達は短時日にて衰微を伴ふたのであつた。すべて永存すべきものごとには得るところの力とそれを保有してゆく力との間に或る均合の力がなくてはならない。而してその均合の力は國民それ自身の性格の中に編みこまれてゐ

なければならぬ。

イギリスの偉大なる創造はその制度にあつたのでもなく、その帝國にあつたのでもなく、その商業にあつたのでもなく、又その文學にあつたのでもなくて、すべてのこれらの効果の影響によつて形作られ、而してそれらの價値の究極的試練であるイギリスの各個人によつて創造されたものである。

個人は、特別なる才能と器量とを持つた性格の認容し得べき模型として存在するものであつて、世界の進歩の決勝線を暫定し、若しくは認定し得た人が、評價せんとするならば、その時に評價すべきであらう。それは丁度、或る人の傳記が、その人の性格が如何にして形作られ、而して如何に活動したかと言ふことの明瞭な觀念を讀者に感銘せしむることが出來なければ、それは不備にして、不完全なものであると同じく、歴史の或る見解が活動を敏捷にして、而して有益に成長してゆく國民生活の原動力としての國民性の形式と運用とを説明するところがないとすれば、それはその目的の一端を忘れたものに相違ない。かゝる歴史は魂のぬけた事柄の羅列にすぎないのであらう。

この思想の糸を辿つて推論せんと企つることに於いて、その出發點を見出すことが必要となる。

私は、人類、又は氣候等の影響と言ふもの、見逃し難いものであることは勿論であるが、今はそれらに就ての臆測は『環境と歴史』と言ふ別の論文に讓つて、記錄された事實の範圍に限らうと思ふ、また私は、興味本意になりそうなイギリス國民性の本源には觸れずして歴史の上に既に表はれてをるその性質と形式とに就いて考へてみたいと思ふ。

## 三

イギリスの歴史に就て最も重要なる點は何かと言へば、それは要するに一の國民的觀念をその國民のために形成した最初の民族がイギリス民族であると言ふことである。吾人は常に知らず識らずに現在の眼を以て過去を眺めんとする傾きがあ

る。斯樣な見方い誤りであることは充分に承知しながら恰かもイギリスの國民が常に存在してゐたが如く過去に就て考へやうとする。玆に人種と國民との區別が存在しなければならぬ。

人種若しくは種族がイギリス國民の住む以前にこの地に住んでその生活狀態の結果たる或る特徵を以て歷史に表はれ來つたことは事實であるが、是等の生活狀態が記錄されてゐない。而してたゞぼんやりと推測することが出來るに過ぎない。吾人は是等の種族と雜婚して新しい生活狀態に變化していつたものであることは容易に想像することが出來る。

この推移と變化との結果、その地の住民に結合力を生じて、國民となつたのであつて、それは共同な生活狀態によつてゞあると言ふよりは寧ろ共通な經驗に基いて一致的動作をなすの有利なるを知り、共存の目的の爲めに團結をかためて一の命令を遵守することゝなつたのである。

國民と名づけらるゝ各團體を吾人が考察すれば、何れの國民もすべて共同的利益と思想との自覺の上に基礎付けられてゐるものであつて、それは長く、而して複雜せる經驗の結果に外ならぬのである。その自覺は、その國民と他の國民とを區別するものであつて、こゝに利害の關係を異にすることゝなり、而してそれらの國民を異國民と呼ぶことゝなるのである。

ヨロッパと言ふ時代思想とヨロッパの各國民と言ふ觀念と、これらの思想と觀念とが、宿る可き土地を殆んど有しなかつたその時から漸次に展開しきたつたのであつて、終にその事態を明かにするまでに成長したのであつた。

北方の民族がローマ帝國に侵入した時、力と元氣との最初の潑溂さとに於いて彼等の指揮者はローマ化された社會をゴート化 Gothia さんともくろんだ。然し、彼が『ゴート人は彼等の性格の制御し難い無智のためにすべての法律を守らうとはしなからうし、また、法律によつて成立してゆく國家からその法を奪ふことは尙ほ更惡いことであることを』學んだ時、彼はその衰微してゆく權力にゴート的勇氣を附加することによつてその故地に

ローマ的名前を復活せんと決心した。かくして、ローマ化されて結合された國家のこの觀念がその時代の可能性と、必然性とに相當したのであつた。而して帝國と法王廳との理論の中にその觀念の表明を見出したのであつた。

この國家からイギリス國民の立場は形作られ、而してすべての恩惠を充分うけたのであつた。然し、イギリスの國民は、その國家に對する義務から、その時既に、逃れ出でんとしてゐた。イギリス國夫れ自身が、一の國家らしい感情を抱くと同時に、或る支配者の下にイギリス國は結合されてゐた。而して最早や、優越なる外國に服從してはゐなかつた。かく言へばとて、私は初期の諸王の名によつて帝國の稱號を假定して不當な重味を加へて、この國民の獨立を、この時に確定しやうとするものではない。

然し、そこには重大なる意義が存してゐる。而してその確實なる發達をとげて生來の觀念を表示したものであつて、それが終に、イギリスは政治學に關する中世の學說を全然脫却することを宣言する文書に於いて、その決定的表白を與へたのであつた。即ち、『種々樣々なる古き確實なる諸物語と年代記とによりて、イギリスのこの國土は一の帝國たることを明かに宣言され、而して表白されてをる。かくして、世界の諸國に認められて、他國家と同樣なる帝冠の權威と帝領を有する唯一の最高主權たる王によつて支配せられてをる。』と。

かくして、イギリスの國民は帝國を有してをると同時に、法王廳を持つてゐた。帝國の權威は影の如くであつて、法王の權威は實際的効力を有してゐた。

然し、イギリス人はそれを認めながら、而かも彼等自身に對するその實際的適用の力を最小限にし始めた。法王廳の司法權が廢止された時は、その權力がイギリスに重に使用されてゐたがためであると言ふ理由ではなくて、勿論この權力に常に反對し、時のいたるを待つてゐたことは事實である。が、寧ろイギリス教會が常に考へてゐたことであつて、而して、或る外國人の干涉なくして、イギリス教會自身の勸めと、義務とを遂行し得る

だけ充分の力を持つてゐたがためである。要するに適當の處置を斷行したのであつた。

## 四

イギリス帝國内に於いて、その國家的特性を最初に展開したる國民はイングランドに住した民族であると思ふ。かく言ふ意味は、古代より既に歐洲の一般的制度と組織とから、離脱せんとする傾向を有ししかも注意深く獨特の道を歩まんとする傾向を示してゐた。

イギリスの利害關係は必ずしも、大陸に於ける利害關係と同一の歩調を有すべきものでないとの考を有して、大陸に流布されてをるある一般的制度によつて束縛されなかつた。この感情とこの思想とは可なり長い間不問に附せらるゝと共に注意せられずして、それは寧ろ一般的にイギリスの地理的位置によるものがあると説明されてゐた。

地理的位置の關係の存したことは勿論であるが、この説明のみを以て充分であるとは、私は思はない。何故ならば、イギリス國の位置はデンマーク人の殖民や、ノールマン人の征服が充分に證明してをるが如く、その古代に於いて、その説明に對して何等の論證も、與へてゐないからである。尚ほまた、イギリス國に屬する諸島は、その自然的境界線を利用して一主權者の下に結合さるゝことを、いそいでゐたと言ふ事實をイギリスの位置によつて證することも出來ない。寧ろ長い間イギリスの軍事的力は大陸に對して向けられてゐたのであつて、島それ自身の範圍内に伸展せんとする希望は一般的人々に對する重大事件ではなかつたのである。國家的境界の意義は大陸に於ける各國民の國家形式に刺戟されてをつたものである。

フランスとスペインとはイギリスの面前に於いて結合した王國となつた。而して彼等の國家的性格は、その目的の實行の周圍に大いに形作られていつた。然るにイングランドはウェルス Wales を合することが遲く、スコトランドを持ち、而してアイルランドを等閑に附して何等の力も示さなかつた。その優勢にして卓越せる發動力はたゞ單に

外部よりの干渉をうくることなくイギリスに起つた事件をイギリス自身の手に於いて所置せんとする强固なる願望に生きたやうである。この願望は、よしんばその本原が如何なるものであるにせよ、イギリス國民性の根柢に伏在するものであつて、その特性を最もよく説明するものである。

一般的歐洲の事件から注意深く離脱せることの結果は、イギリスは歐洲世界の動搖を惹起する一般的思想より超然として、その圈外に立つと言ふことであつた。是等の思想は人心に强き刺戟を與へた二つの偉大なる事件に於いてその實際的表現を與へたのであつた。即ち一は十字軍であり、他は皇帝と法王との爭ひであつた。

イギリスはその十字軍的熱烈によつて、何等の動搖も起さなかつた。リチャード一世 Richard I. の遠征は個人的事件であつて、國家的事件ではなかつた。エドワード一世 Edward I はホーリ・ランド Holyland へと遠征をなしたが、それは公認の資格を得て軍事的經驗を得たに過ぎないのであつた。また、教會上に烈しき論戰に於いてもイギリスは何等の意見を發表しようとはしなかつた。アンセルム Anselm がこの問題をイギリスに紹介した時に、それは何の熱勢もなく、冷靜に議論された。而してヘンリー一世 Henry は一の妥協案を案出することによつて僞らざるイギリスの精神を示した。その立案に於いて彼は彼の實際的に欲するすべてのものを披瀝した。イギリスの同情は大體より言へば、皇帝側に屬してゐた。しかも、皇帝側に屬しながら皇帝側に力を與へるが如き有樣に於いて言ひ表はされてはゐなかつた。イギリス人がこの問題に就て筆を取つたとするも、その議論と意見とは、國外の事件として取扱つたのであつて、國内の事件としては、不關焉の態度を取つた。

要するにイギリスはイギリス自身の政治的實際に眼をすゑて嚴かにイギリスの政治的理論を組み立てんとしたのであつた。

これは、他の國民が、容易にイギリス人を理解し得ない事實を或る程度まで説明する重要なる點である。イギリス人は何時でも、大陸に於いて流行する一般的思想をそのまゝうけ入れることなし

に、暫くの間傍觀的態度を常に持してゐる。イギリス人は抽象的問題を引き起すか、或は理想的計畫に身を委ねる傾向がある。十一、二世紀に於いて起れる大思想に對して彼等の取つた不關焉の態度はフランス大革命の時に彼等が取つた傍觀的態度と同一であつた。

彼等は將來に於いて達せらるべき主義に捕へらるゝことはなくて、彼等自身の現實の生活に關連して、自身を考へたのであつた。從つて彼等は彼等が見能ふ道の上にのみ歩みを運ぶのであつて、視力の及ばない範圍に進まふとは斷じてしない。かくして、吾人は一般的に理解し得るが如き理想的に組織ある言葉を以てイギリスの國家的生活の意義を現はすることは出來ないのである。

## 五

しかも、こゝに私は、イギリスの國民が、常に抽象的理論を看過せずして、時としては、それが自己の立場を說明するために必要なる場合には、その理論を借り來たり、而して伸張するの偉大なる才能を有することを特記せねばならぬ。

イギリスに於ける帝王權の神授說の巧みなる展開と、イギリスの政治に於けるその實際的適用とは、他歐洲の各國に於いて實行された實例と、優に比較し得るものがあると思ふ。然しながらそれがその直接的目的に役立ちてそれより以上に實行されてゆくと忽ちに、それは凋まされて、而してもつと實際的に必要であるところの他の理論へと變化されてしまふのであつた。實にイギリスの政治學は實際的精神の理想主義は小さなイギリスに取つては絕對無妥協主義であることを示してゐる。が、その眞の絕對無妥協は、すべての事件の餘燼をイギリスに止めなかつた。

イギリスの政治意見は、しば〳〵理想的であるが、その理想的意見は、速かに變化してゆく、而してその變化は主義に對する說明によつて更に影響をうけない。而して、それは一般に論理的說明を與ふることは出來ないのである。

一般に政治界の大きな思想から離脫してをるイ

ギリスは、イギリス自身の事件を自から處置せんとする希望より、かゝる狀態を示してをると共に、彼等が必要に迫まられるその必要に應じて、その制度を適用せんとする、この重要な點に就いて多少の說明を加へねばならぬ。この事はイギリス歷史の構造上の部分が立憲的歷史であると云ふことこの立憲的歷史が非常に混亂を示してをる親しい事實に於いて表明されてゐる。ある定まつた主義、若しくは原理に基いてイギリスの制度の發達を說明せんとすることは困難である。彼等の展開は、一般的思想の遠大なる力から來たのではなくて、國家的生活の事實に基づいた用心深い調整の結果であつた。そこには、たとひその組織が卓越したものであつても、組織の成立に對しては固陋と思はるゝほどの剛直な恐怖があつた。また、そこには常に合理的にして秩序立つた仕組みの言葉でその組織を理解せしめんとする企に對してする國家的又地方的の斷乎たる反對があつて、古い慣習を持せんとするのであつた。

これはイギリスの法律史に於いて、等しく顯著な點である。『イギリス法が、それ自身の存在の顯著となる所以は教會法とローマ法とに對立することである。』とさへ言はれてゐる。

イギリスの習慣法は、成文律となされた。それは彼等の法典編纂に對する意見からではなくて、その習慣法が海外から編入せるゝ論理的組織に對して維持されてゆかんがためである。その習慣法が、一度公法的に述べられた時は、その法は頑强に主張されたのであつた。例すれば、キリスト教諸國の實際と正義公道とに一致せんがために、たゞ僅かなる事件に於いてイギリス法を修正せんとしたメルトン議會 Merton Parliament に對する男爵黨 Barons のあの有名なる拒絕ほどイギリス人の特性を明瞭に說明してをるものはないと思ふ。"Nolemus leges Angliae Mutare," の語は國家的保守主義の爆發の表現であつて、望まれた修正それ自身に對して說かれたものではなく、それが支へられた正理を說明した語であると思ふ。イギリス法は何の理由もなく、イギリス法なるが故に保存せられねばならぬのである。やがて來たるべき

を說明し得る主義であつても、それを認めることの危險がそこに横つてゐた。

この性質の永存の結果は、イギリス國に於いて現存する制度と權利と要求權とが、その成立の長い歷史をくり返すことなくしては說明することが出來ないことになつてゐる。他の各國民は火山的爆發によつて沈められた彼等自身の歷史的過去の建物を發掘することによつてその痕跡を見出すことは可能である。これは考古學的興味を與へるのみならず、それによつて吾人は豫期せざる結果を齎らすことがある。

かくして他の諸國民は過去に於ける光榮ある記憶を呼び覺ますか、或は、國民的熱誠の高調を奏づることもあらう。が、如何なる國民もイギリス國民ほどその現在にまでそれほど完全にその完き過去を持續しきつたものはない。イギリス人に取つては、歷史的聯想は偉大なる事件開發の場合に於ける修辭的引照の事件ではなかつたのであつた。然しながら、その聯想はイギリス人がなしたすべてのものゝ中にイギリス人を取りまいてをり、また、イギリス人の實際的生活が築かれたその上に權利と義務との意識を惹き起してゐる。

ある頓智に長けた外國人が、『若し三人のイギリス人が荒寥なる島に難船したと假定すれば、彼等の取るに第一の手段は、その中の一人は何事かを發議し、第二の人はそれに贊意を表し、第三の人は議事を開始するに決したであらう。』と諧謔の語を與へてをるが、實に穿ち得た比喩であつて、是れより以上に私は說明する要を見ないのである。實に面白いと思ふ。

## 六

私はこの比喩に含まれた意味のすべてを推論する要を見ないのであるが、この中の一點は實にその要領を捕えてゐると思ふ。イギリス人はイギリスに於ける組織制度の漸進的發達は、その制度のすべてが現存するが如く、イギリス國民を處理する希望により形成されたのであると言ふ保證であると信じてをるが故に複雜な而して古い制度の下

に生活することを滿足してゐるのである。

イギリス人は、イギリスの法律と制度とはイギリス人に適するやうに作られたものであると考へてゐて、その法と制度とに適するやうに教へらるると憤慨するのである。

かゝる狀態にあるイギリス人は、より嚴正に適用さるゝ簡單なる組織の下にあつては、御し難い人間となるのである。ある旅行してゐたイギリス人が、その土地の人々にはある規則を遵守するにさほどの困難を感じない一般的の法則に對して、彼の旅行にあると言ふ特別の場合に於ける權利を充分に使行せしめなかつたが故に、虐待されたのであると言ふやうなことがしば〳〵あることをきくのである。

イギリスの苦情の種は、その規則は少しも彼の特殊なる場合であると言ふことを考へに入れてゐないと言ふことゝ、その規則に從ふやうに强ひられてをると言ふ意味に伏在してゐるのである。是は取りもなほさずイギリス人の暴虐的態度の意識の根柢をなしてをるものであるまいか。

かくして、正義と言ふイギリス人の意義も法律と制度とがもつと合理的に理解されてをる他國民の言ふ正義とはその意義を異にしてゐるのではあるまいか。而してイギリス人はイギリス人自身の制度より以外に對しては無理解の下に動かんとするのであらう。

然しながら、そこには、イギリスの制度の成立には古き因襲の附加された結果がある。その結果のために不當なる外國よりの批判のあることも見逃がしてはならない。イギリス人はイギリス人自身に適する政治の組織を創設したのであるが故にそれに對する全責任のあることは無論であつて、その政治組織の主なる方法に於いては單純に見ゆるけれども、その眞實に於いては、それが他の國に適用されるには不適當であるほど、それらの主なる方法の下に成り立つてゐるのである。イギリスの議會政治の方法は自由に摸寫された。が、然しその方法の眞價は正にイギリス人に負ふものがあるのであつて、その眞價は完成した制度の卓越にあるのではなくて、寧ろそれが長い試練に堪へ

きたつた道程に存するのであらう。イギリスの制度はその制度の完不完を論ずべきものでなくて、その制度を運用しきたつたイギリスの態度と力との成功を認む可きである。

而してこれはすべての機制體 Mechanism の基礎をなすイギリスの國家的生活の一致團結に原因するのであつて、それがこの機制體にイギリス固有の力を與へてゐるのであると思ふ。

イギリスの制度をそのまゝ模寫し使用するとしても、それを使用した人達が豫期するほど巧みに運用し得ざるところに一の不滿と不完全とを感ずるであらう。政黨政治と言ふことは一見甚だ卓越したものに相違ないが、その横暴を防がんがためには、その黨派の員數を限らねばならぬ。而して人意的にその數を限ることは甚だしい弊害を伴ふことがある。內閣組織の諸大臣が公式の輿論に敏感であることは結構であるが、六ヶ月より以上續くことが出來ないほど過敏であることは張り合ひのないことゝ言はなければならぬ。しかし又、鈍感を裝ひながら多數黨の力を以て横車を押さんとすることも同じく苦々しいことである。私は前節に於いて國際關係は互に競爭しつゝある商事會社のそれと比較し得るものであると記した。その創立が古く、而して長い年月を經來たつた老會社がうける利害關係と、その國の成立が、古く、而かも長い變遷の歷史を有するイギリス國との利害關係は全く等しいものであるとの斷言は出來ないけれども、少なくともイギリス人はその團體を宣傳するために最新型の廣告術に從ひ、或は各國に對するイギリスの態度を說明するために最新型の廣告術に從ひ、或は各國に對するイギリスの態度を說明するために最新の方法を採用する必要はないと思ふ。

イギリス人はイギリス人の背景として光輝ある長い時代を明瞭なる信用との自覺の下に進行し續くべきであらう。イギリスは正に全世界に於ける最古國の一として、又堅實なる指導團の一として尊敬せらるべき國であることは無論である。

## 七

イギリス人は歐洲大戰亂の成功によつて、その正義を立明し得たことを愉快に感じてゐるであらう。而して、他の國民が戰慄せざるを得ない危機に際しても、その難關に堪ゆる自負心を强めたであらう。かくしてイギリス人は他の國の輿論に對し殊更に敏感になるの要を認めないし、また、イギリス人が無遠慮に感じたまゝを發表する意見に對して他國民の神經過敏なるを見て却て驚いてゐるであらう。

世の中には自己存在の主張に二つの形式があると思ふ。今この說明をイギリス內の實例を假りに與へたいと思ふ。即ちオックスフォド人 Oxfordman とケムブリッヂ人 Cambridgeman との相違はそれであつて、その相違が一の鋭い而かも適確な警句によつて說明されてゐる。即ち、

"An Oxfordman looks as if the world belongs to him; A Cambridgeman looks as if he did not care to whom the world belongs."

と言ふのである。

私はこの驚句の中に含まれた意味が眞實であるか、否かを論議しやうとするのではなくて、兩者の相異つた性質が面白く見事にこの數語の中に盛られてをり、而かも、兩者の相違のその性質によつてお互が惱まさるゝところに言ひ表はし得ない妙味を覺ゆるのである。

然し、誰に世界が屬してをるかに注意しない人は、世界がその人に屬してをることを主張する人に對して極端に惱まされてをるのではないかと思ふ。是れは他の國民に對するイギリス人の態度を明瞭に說明し得たものである。

イギリス國以外の人達はイギリス人の光榮を物語る。又、彼等はイギリス人の要求權を枚擧する。又、彼等はイギリス人の成功を數へ上げる。又、彼等はイギリス人の思想を念入りに仕組むか、イギリス人は何の感興も起さずに耳を傾ける。而して答へさへしない。

イギリス人は是等のことに對して論爭する必要

を見ない。彼は將來に何事が起つて來やうとも、彼が過去になしたと同じ樣に多くのことをなすべき餘裕と餘地との存することを信じてをる。而してそれで充分なのである。かゝる態度それがイギリス人をして高慢であり、冷淡であり、而して不同情であると他國民をして呼ばしめるイギリス人特有の態度であらう。

實に吾人はイギリス人が健實なる成功の長い時期と共に辿り來つた間に養成された頑固な點のあるものがあることは認めざるを得ない。然し、イギリス國の歷史の展開の順序と、道程とを他の國々の歷史のそれと、比較してみる時、なまやさしい事件の變遷に何の變りも、あらざることを知つて思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

北方蠻族の侵入による征服者の幾世紀間の壓迫や、國家結合を實現すべき長い間の鬪爭や、受難的國民によつて明瞭には表現することの出來なかつた希望を遂行し得る强き力と固き意志を持つた人の出現を如何に長く、而して如何に熱心に期待してゐたことや、國家的失望の悲愴なる爆發や、狂的に追求した一般的幸福の空想や、疲勞と困憊とに終つた宇內統一帝國の夢想等數へ來たれば、數限りもないのである。これらの事件はすべてイギリス國民を惱まし、苦しめ、泣かしめたものではなかつたか。これらの一喜一憂はすべてイギリス國民の性格の中に織り込まれてゐるのであらう。

否な、それはイギリスの國民にのみ限つたことではない。吾人が吾人の周圍を見るとき、吾人はすべての國民の性格の上にこれらの事件のいたいたしい痕跡をすべての方面に於いて認めざるを得ない。或る性格には空想的性質の優つたものもあらう。又、不合理に滿ちた性格のものもあらう。また熱狂的性格に生れる國民もあらう。

然し、吾人は受難と苦惱とは思想が沁徹することが出來ない境地への洞察力を與へるものであることを忘れてはならない。而して、苦しみをうけない幸福な境遇に育つ人は苦しみをうけた人の經驗に基く教訓をその人より學んで自から反省し內省することが賢しこいのであらう。

歴史は吾人に他國民の國家的興亡に對して深き思念をいたすべきを教ゆるのである。かくして、吾人は多くの國民が經驗し來つたすべての分離すべからざる結果であることを思ひいたる時、單なる想像と偏見とに迷はされてはならないのである。而して、イギリスが自由に吾人の間に申し出づる注意が何時も一樣に、而して攻擊的に合理なものであるとは信ぜられないのである。

何故ならば、イギリス人はイギリス人自身のために或る決定的政策を組織することを嫌ふ如く見えながら、他國民に對しては常に注告を與へんと用意しつゝある樣に見ゆるのはイギリス人の一の特徴である。これは明かに一の矛盾を含むものであつて、理解に苦しむものである。（未完）

朝日融溪